

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名	湘南医療大学
所 属	保健医療学部 看護学科
名 前	倉田慶子
作成日	2024年9月14日

1. 教育の責任

私は、2024年4月に着任し、ヘルスケア看護領域 小児看護学において、教育に携わっている。年度のシラバスにおける次の科目の担当となった。

1) 実践看護論Ⅲ(選択)1単位 15時間 4年生前期

15名の学生が履修した。小児看護の専門性について学修する方法として、テーマを設定したディベートを実施した。「小学校高学年の子どもにスマホを持たせるべきかどうか」「学童期の子どもに間食を進めるべきかどうか」について、2つのグループに分かれて討議した。テーマについての文献検索や討議内容についての助言を担当した。それぞれの立場に立って、先行研究の知見を学修した上で、有意義な討議ができた。

2) 統合実習(必修)2単位 90時間 4年生前期

7名の学生が履修した。各学生が先行研究をもとにテーマを設定し、実習の課題を検討した。先行研究の文献検討の助言、レポートの指導、小児科外来における実習指導を担当した。私は3名の学生を担当し、「学童期の小児がんの子ども母親の病気や治療に対する思いの変化」「子どもの在宅療養における訪問看護師の役割」「看護職として課題を抱えるきょうだいへの支援」のテーマに沿って、学生は考察した。それぞれの学生が明確にしたいと取り上げたテーマについて、考察を深められた。

3) 小児看護方法論(必修)1単位 30時間 3年生前期

子どものフィジカルアセスメントの学修、急性期の疾患の子ども事例をもとに看護過程を展開し、子どもとその家族への援助について具体的な援助方法について演習し、看護技術を獲得する。講義科目として、「フィジカルアセスメントの方法」「障害をもつ子どもと家族の看護」を担当した。看護過程の展開では、小児の疾患の病態と治療、発達、家族の育児観を踏まえた関わりの視点から分析できるように、データベース、経時記録、体温表(経過表)の記述を助言した。

4) ヘルスプロモーション実習(必修)4単位 180時間 3年生後期

地域で生活しているあらゆる発達段階にある人々の健康の特徴や地域特性を理解し、地域で暮らす人の健康の保持・増進するための支援の実践を学ぶ実習のうち、チャイルドヘルス実習について担当している。本実習は、今年度から開始される新カリキュラムの実習科目であり、小児科外来、幼稚園、子育て複合支援施設の3か所での実習によって、学修目的が達成できるように指導する。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

障害児と家族については、看護教育の中でも、障害児に関する授業はコマ数が少なく、学生のうちに知ることがなければ、看護師として知り合うこともないことがほとんどであった。しかし、

医療が進歩し、余命が長くなった今日では、救急や成人医療の場で医療を受け看護されることもある。医療的ケア児が成人医療に移行する必要性もあり、障害児者の看護は専門施設の中で展開されることではなくなったと考えられる。しかしながら、こうした変化について、教授できる教員は限られており、私の使命であると考え。それらを大学内ではもちろんのこと、社会貢献としても啓蒙活動や教育活動として実施していく必要がある。健全な子どもと障害児と共に統合保育されている場においては、障害児への偏見がない。初学者である学部生の内から、障害児者看護について学修し、その知識と技術が活用できるように教育に携わっていきたい。健全な子どもの成長・発達段階やその過程における看護を理解した上で、障害を持つ子どもの特徴を理解し、看護できるような授業を展開していかなければならない。

2) 理念をもつに至った背景

私は、障害児看護の臨床で 24 年間看護師として従事したのちに、大学教員となった。臨床経験のうち、小児看護専門看護師として 16 年間は、教育・研究・調整・倫理調整・相談・実践の 6 つの役割を遂行した。障害児看護は、新卒の看護師が従事する臨床の場ではないと考えられていた時代背景がある中で、数多くの障害のある子どもと家族とその支援者達から、「看護」を学んだ。障害の分類の中でも、肢体不自由と知的障害が重度とされている重症心身障害児の看護や医療は、私が看護師となった時代には施設看護が主流であった。しかし、施設の定員はいつも満床であり、医療を必要としながら生活する子どもを地域で支援する必要性が高まり、外来の兼務として訪問看護が開始となった。その部署に私は看護師歴 3 年目で配属され、私が自分自身のサブスペシャリティとなる地域で生活する重症心身障害児者と家族を看護するようになった。こうした経緯から、入院している状況は、在宅生活の一部に過ぎず、その子どもの生活が医療や入院生活によって分断することなく看護しなければならない。入院前の子どもの様子と退院してからの子どもの生活が線で繋がるように捉えて対応しなければ、子どもと家族の生活リズムは狂ってしまう。また、地域で子どもと家族が生活するためには、社会福祉や教育などの多くの職種が支援をする。多職種連携の視点は、重要である。これらのことを学生のうちから学修し、臨床での看護で活用できるように教授していく必要があると考える。

3. 教育の方法・戦略

【概要】

看護専門職になるには、医療の知識・技術・姿勢の獲得が必要となる。これらは、看護基礎教育に必要な基本的な学修を基に、階層的に積みあがると考えられ、小児看護学の知識のみによって成立しない。このため、小児看護学にかかわる知識だけでなく、基本的な人体の解剖生理の知識を学修できているのかを確認しながら、新しい知識の教授を行っている。技術の獲得についても同様に、原理原則の知識が獲得できていることを確認する必要がある。また、看護専門職においては、技術提供時における姿勢も重要であるため、学修に臨む姿勢

や技術演習時の振る舞いなども適切であることを教授している。

【授業の工夫】

講義時に使用する PPT には、文字だけでなく、写真や動画を可能な限り使用し、視覚的に理解できるように工夫している。また、演習時においては、事前学習などで学生が個々に知識を得た内容を口頭で答えるように質問しながら進めている。演習では、単なる技術を実施するのではなく、状況設定をしながら実施できるようにしている。

<シミュレーション演習の実施>

学生に事前学習として知識を得てから、演習に向うように教授した。その上で、シナリオを設定し、学生に実施を促した。その後、デブリーフィングを実施し、学生間で討議し、自らが体験したことから、最適な看護を導き出した。学生の実習では、1名の患者について、担当することが多く、多重課題については臨地実習で学修する機会を得ることが難しい。そのため、4年生の統合実習などに多重課題のシミュレーション演習を取り入れることで、実践に近い患者の対応を経験することが可能となる。

4. 学習成果

授業について、学生からのリフレクションペーパーからは、次のような回答を得た。

- ・今回の講義を受けて、障害をもつ子どもは、健常児と同じように病院や地域で生活していて、障害をもつ子どもが自分自身でできないことを支援することが大切であると感じた。障害をもつ子どもができないことをただ支援するのではなく、自分自身でできるようにしていくことが必要である。その子の弱みを強みに変えていける看護をしていくことが大事になると考える。また、安全に生活していきながら、障害をもつ子どもや家族の QOL が向上出来るような支援をしていくことも必要となる。以上のことから、今回学修した内容をよく復習していき、今後の実習や演習に繋げて行けるようにしていきたいと考える。
- ・今日の講義では障害をもつ子どもの看護について学び、実際に写真などもみながら子どもの理解を深めることができました。また、子どものできないところに焦点を置くのではなく強みを見つけ弱みに対して生活しやすくするために支援していけるよう観察していくことが大切であると学びました。また、動画では小児専門の訪問看護もあるということや育てている親、特に母親には大きな負担がかかることから親や家族に対する支援も非常に重要であると感じました。
- ・今回の講義で障害のある子供と家族の関わり方について学ぶことができた。障害と聞くと何かができないとってしまい、助けなければ！とっていた。しかし、今までの他講義と今回の講義内容を統合すると障害による弱みはあるけど、強みをしっかりとアセスメントし強みを生かした看護が大切だと思った。また、身体、精神上に弱みはあるが周囲の環境次第では生活機能に大きく影響する。そのため、アセスメントした強みを生かした環境を

整えることも大切である。人はそれぞれ価値観や嗜好、ライフスタイルが存在しており、それが人を形成していくと言ってもいいぐらい、固有のものである。看護をする際にそのことも頭に入れて関わることでその子にあったケアを提供できる。そのためには障害の種類や特徴を理解し、対象となる子供を理解する必要がある、家族という環境などについても理解することも必要となる。これらを行い、対象となる子が本当に求めているケアを実施すること。そして状況に合わせた関わりをすることが大切だと思った。

- ・バイタルサインの測定順は知ってはいたけどなぜその順番なのかは分からなかったので、直接触れなくても良い項目から測定するということが今日の授業で理解できた。身体計測は子供はじっとしてられない事があるので、看護師 2 人で行ったり、絶対に目を離さないなど、安全に考慮して行うことが必要だと分かった。
- ・今回の講義で学んだことは、小児のフィジカルアセスメントについて学んだ。今まで、大人のフィジカルアセスメントしか学んでこなかったが、今回小児のフィジカルアセスメントを学んで、声掛けの仕方や測定の順番が小児に合わせた方法で行うことが大切だと学んだ。大人は知識があるため、今から何をするのか等理解できるが、子供はまだ知識がないため何をされるのか分からないから不安になって暴れたり大声出して興奮状態になるため、声掛けも「もしもしするね、ギュッとやるよ」など簡単な言葉や擬態語を使うことで少しでも理解してくれるとわかった。たくさんの測定をすると徐々に怖さも増して来るため、声掛けと手際よく測定を行うことが大切だと思った。これからの演出で練習して、実際に実習でスムーズに行えるように、これから復習していきたい。

上記の内容から、学修目標に沿った講義内容を展開できたと考える。今後も、学生の理解度を確認しながら、講義や演習の内容を検討し、学生が学習目標に到達できるように取り組む必要があると考える。

5. 改善のための努力

小児看護に必要な小児に特徴的な身体の解剖生理学や疾患についての知識を定着させるために、小児看護方法論などの教授の際には繰り返し知識を定着させるために問い返しをする。その度に、学生には主体的に学修できるような資料を提示していけるようにする。

リフレクションペーパーなどから、学生の講義や演習についての理解度を確認しながら、次の授業の組み立てに活用する。

6. 今後の目標

<短期目標>

次年度の小児看護方法論のシラバスを作成する際には、今年度の成果を見直し、学生が理解しやすい授業内容を作成する。ヘルスプロモーション実習において、実習施設の指導者

と共に連携し、今後の実習を円滑に運営する。

<長期目標>

学部学生が小児看護を専門領域として選択ができるように、臨床のトピックスを取り入れた授業の組み立てをする。その上で、実際に臨床で小児看護を実践する卒業生と共に学習会などを開催し、教育と臨床の連携を強化する。